

あんげろす

読書のすすめ

中野 綾子

1943年11月に発行された『三田新聞』の「学徒出陣特集号」(537号)には、「戦陣に如何なる書を携行すべきか」という特集が組まれている。学者等へのアンケート結果の集計記事で、回答の中心はやはり『万葉集』や『古事記』だが、回答は思いのほかバラエティに富む。

評論家の清沢冽は、「学徒の携行する書物は、その専門とその信仰によって異なる」として、「仏教信者は経典、キリスト教徒は聖書」をと勧める。そのほか「聖書」を挙げたのは、石原謙、渡辺一夫、野村兼太郎といった人々である。

記事中央には、宮本三郎による兵士たちが体を寄せ合い横たわりながら読書をする挿絵が添えられているのだが、果たして学徒兵がこの挿絵のように戦地へ書物を携行し、読むことができたのだろうかと考えずにはいられない。

第84号

2021年3月



二〇二一年の「建国記念の日」に思う。

小森 陽一

あしかけ五年の、チェコスロヴァキアの首都プラハでの生活を終えて、一九六五年の末に小学六年生で帰国したとき、日韓基本条約批准に反対するデモが繰り返されていた。翌年春中学に進学すると、社会科の先生たちを中心に、家永三郎さんの教科書裁判の話で持ち切りであった。目の前に教育大学附属中高の校舎があり、東京教育大学も電車通りをわたってすぐの文京区の公立中学だったので、家永さんのことは、身内のような感覚で話あっていた。国家が歴史教科書の記述を検閲するとは、恐ろしい国に帰って来たものだと思う日々であった。

この年の六月に「国民の祝日に関する法律」が改悪され、かつて「紀元節」として位置づけられていた二月一日とする方向で、年末に「建国記念の日」が答申され、六七年二月九日に政令公布された。中学校の教職員組合の先生たちといっしょに、全学年のかなりの数の生徒も、二月一日に自主登校した。以来、中学校、高校時代は「自主登校」という形態で抗議の意志表示をし、大学・大学院時代は学内で反対集会、大学の教師になってからは毎年、全国各地の「紀元節反対集会」で講演をすることになっていった。

今年二〇二一年は、東京の紀元節反対集会で、「菅政権による憲法改悪と日本学術会議会員任命拒否問題」と題した講演を行った。菅義偉政権は、「自らの任期中に改憲をする」と宣言していた安倍晋三政権を、そのまま引き継ぐものに他ならない。その菅政権の下で日本学術会議候補者六名の任命拒否が行われたのは、この政権が自らの方針を貫くために平気で日本国憲法を踏みにじる政治を行っているからだ。

「九条の会」事務局を、私と一緒に担っている小沢隆一氏が、任命拒否された一人だったことは、この事態の本質を明らかにしている。小沢氏は憲法学者として、二〇一五年の国会に出された、戦争法としての「安

全保障関連法案」が、明確に憲法違反であることを国会で述べたからである。アメリカから要請されている、自衛隊を軍隊にして、日本を「戦争ができる国」にする安倍改憲路線に、反対する学者たちが「任命拒否」されたことは明白だ。

教育学者の佐藤学さんたちと語らって、この年「安全保障関連法に反対する学者の会」を結成した。その代表となられたのは、学術会議の議長をつとめていた広渡清吾氏であり、多くの学術会議の会員が賛同人となった。その二年後の二〇一七年三月二四日に日本学術会議は、「軍事的安全保障研究に対する声明」を出し、「戦争を目的とする」あるいは「軍事目的のための」科学研究を行わないと宣言した。

日本を「戦争が出来る国」にしようとする勢力によって、日本学術会議は敵視の対象になっていたのである。菅首相による日本学術会議会員任命拒否に対して、声明や要望書を発表した学会や団体は、昨年末段階で一二六六団体となった。

社会文化法律センター、青年法律家協会、日本反核法律家協会、自由法曹団、日本国際法律家協会、日本民主法律家協会によって構成される「改憲問題対策法律家六団体連絡会」の「菅内閣総理大臣による日本学術会議の会員候補者の任命拒否に強く抗議し、日本学術会議法に則って会員候補者全員の任命を求める声明」では、「今回の任命拒否は、単に学術の分野における政治の介入にとどまる問題ではなく、政府による一般市民の思想・信条の自由、表現の自由など精神的自由権全般への広範な侵害へとつながる危険を持つきわめて重大な問題である」と指摘している。

「建国記念の日」自体が、歴史学をはじめとする学問の自由を踏みにじり、神話に過ぎない神武天皇即位の日を「祝日」として強制することにほかならない。あらためて、学問の自由、思想信条の自由、表現の自由を規定した日本国憲法の精神を大切にしていきたい。

こもり・よういち（本学客員教授）

明治学院大学との30年、キリ研との15年

吉馴 明子

1988年4月恵泉女学園大学開学と同時に私は跡見学園短期大学から恵泉へ移りました。爾来21年を多摩センターの恵泉女学園大学で過ごしたことになります。着任当時、娘は小学校上級になっていましたが、息子はまだ小学校へ入学したばかりでした。大田区馬込の家から、丸子橋を渡って多摩川沿いを登戸近くまでドライブし、そこから町田方面へ下る、片道1時間半ほどの通勤でした。二子玉川あたりでふと対岸をみると、何だか小さい子どもたちが川縁で、少しは足が水に浸かっていたかもしれないのですが、何やら拾ってるようなのです。もしや、息子たちの「石拾い」？そうでした、石が川を流されてくる間にどんな形になるかを調べるための実習だったんです。そんなわけで、現役の母親業、家事がありました。また職場では、学科主任に始まり、図書館長、宗教委員長、教務部長など役職のハンゴでした。ほとんど研究はできず、その間に書いた論文は、はずかしいことに、二、三本に過ぎません。

だから、60才を越えると定年退職の日を目指して準備を始めました。2006年後期にはリーブをとり、研修先を明治学院キリスト教研究所に置かせてもらいました。植村正久は1877年から、後に明治学院になる一致神学校で学んだので、私の研究上も最適の学院でしょう。(ちなみ明学大政治学科では1992年「政治思想2」が開講し、私はこの科目を日本政治思想史として担当し、2013年まで非常勤として勤めました。)

そして10月にはロンドンからオクスフォードへ、2月にはエディンバラとケンブリッジに、それぞれ1週間ほど滞在し、宣教師関係の書簡や聖書協会の記録などを見て、集めてきました。



ただ、それらには植村正久など日本人牧師の名前は見つけられませんでしたので、植村研究は、本人が残した文章に当たって進める他ないと思い決めました。昭和女子大の『近代文学研究叢書』の中の植村正久の著作年表を頼りに『福音週報』総めぐりならぬ、マイクロフィルム通覧を始める事にしました。1997年秋には三鷹市の国立天文台近くに引っ越したので、ICU図書館へ自転車で通ってマイクロを読む事ができるようになってました。子どもたちはそれぞれ大学と中高一貫校に入り、母親業はほとんど卒業。相棒は猛烈社員から牧師へと進路変更、漸く私も自分のために使う時間が増えてきました。

2009年3月に退職すると、9月後半には福澤諭吉の「帝室論」に対する植村正久の批判を『近代日本研究』に寄稿し、研究者仲間に「政治思想」史を諦めてないよ〜とアピールしました。続いて内村研究会でも「内村鑑三と非戦論」を報告しました。駆け出しの頃政治学会での海老名弾正についての発表を聞いて、内村鑑三研究会へお誘い下さった渋谷浩先生(明学名誉教授、日本政治思想史担当に招いてくださったのも渋谷先生)とのお約束を果たすためでもありましたが、日本のキリスト教に足場を置いて研究を続けるという意思表示でもありました。

退職後最初の植村論「若き植村正久の伝道路線」は、2010年12月発行の明学キリスト教研究所紀要43号に掲載していただきました。この時植村が福澤諭吉の影響を深く受けていることを発見して驚きました。中でも「高尚な気節の欠如、猜疑心、団結力の不足」という「道義心不在」による病態リストが、福澤の描く「文明の精神」のネガ像とほぼ一致するのは驚きでした。それでは「国家の独立」覚束なしと福澤はいい、植村も道義心不在では日本社会に「剛健不挫の進歩」を期すことはできないというのです。植村家は明治維新で没落して横浜へ出たのですが、その時植村は10才。これからの日本がどうなるか五里霧中だったといえます。福澤諭吉の『西洋事情』『学問のすゝめ』『文明論の概略』は、植村に日本と自分自身の行くべき道を照らす灯だったのです。

その後も私は毎年1本研究論文を書く事を目標にやってきましたが、2012年3月にはICU『キリスト教と文化』43号に「A biographical sketch」の翻刻・翻訳・と解題を掲載してもらいました。原資料は東大明治文庫所蔵のThe Tokyo Independentですが、その記事を接写によって写し、文字化する作業から始めました。文字化のドラフトは恵泉の4年生にお願いしました。彼女は日系ブラジル人で、英語だけでなくオールラウンドによくできる学生でした。18才人口がピークだった頃の入学生で、彼女も含めて教員と関心を共有できる学生と出会えたのは感謝でした。植村は、紀貫之の和歌を英詩に訳し、西行らを論じているのです。いつ、どこで、このような古典の知識を得たのか、しかも異文化育ちの宣教師たちに伝えるために書かれた英文のみごとき、文字通り驚嘆ものでした。

植村正久に睨まれたらおしまい、暴君だったという評判は私も知っていますが、そりゃそうだろう、とてもかなわないと思わざるを得ませんでした。その魅力に取り付かれて、10余年の月日が流れました。本年度は、ICUアジア文化研究所の紀要に「北海道開拓殖民の夢と実情」を寄稿しました。武田清子先生を記念して2018年11月に開かれたワークショップ「アジアと向き合うキリスト者」での報告—坂本直寛が高知から北海道へ移住し、農業開発のため共同体を形成—を展開したものです。植村正久は彼らの開拓共同体形成を応援していました。あと一踏ん張りして、大正時代の植村—朝鮮伝道も含めて—を追い、日本におけるキリスト者の生き方、キリスト教の歴史を考えたいと思っています。

よしなれ・あきこ（協力研究員）

追伸：篠崎先生、『井深樞之助訳 新約聖書 馬可傳 俗話』
解題ありがとう。もう「不良」クリスチャン卒業よね。

吉馴 明子

雑録

2月16日付で、本研究所協力研究員鈴木進氏の手になるオケージョナルペーパー『井深樞之助訳 新約聖書 馬可傳 俗話（日本聖書協会所蔵）』が刊行された。1881（明治14）年のマルコ伝日本語訳で、「俗話」というのは「言文一致」という意味に近い。尤もこれは、二葉亭四迷「浮雲」の「言文一致」より6年も早い試みである。鈴木氏が想像するように井深にヒントを与えたのは江戸の人情本や明治初期の落語速記本などであったか、あるいは「演説」という「新しいメディア」（小森陽一氏『日本語の近代』岩波書店、2000）の影響などもあったのか、さまざまな想像を呼ぶ。

本書に収められた鮮明な影印を見ると、変体仮名が多く使われている一方で、カタカナに傍線を付した人名（イエスなど）や二重傍線を付した地名（エルサレムなど）もあり、日本語表記が確立する前のざわめきを感じることが出来る。巻末には、鈴木氏自身が、その後の各時代に漢語化、文語化（戦後再び口語化）していった聖書訳と『馬可傳』の語彙を比較して作成した一覧表があるのだが、そこから、たとえば『馬可傳』の「文末辞」は大半が「口語」でありながら、一部に漢語的なもの、文語的なものがまじることがわかり、20世紀初めに「言文一致」の基本がほぼ確立するまでにどれほどの日本語文体の試行錯誤があったのかがよくわかる。『馬可傳』の読者に少しでもわかりやすくイエスの生涯を伝えようという井深の情熱と、井深自身の高度なリテラシーの間で、「日本語（表記）」が揺れ動くさまが、140年後の読者である私には、非常にスリリングに感じられる。

こうした井深ら先人の情熱と努力の歴史がありながら、なぜか日本のクリスチャンは人口の1パーセントに満たない。また、信仰の有無にかかわらず、キリスト教（歴史や文化も含む）の研究にかかわる人は、もっと少数だろう。しかし、社会の中で少数派であるということは、自分がなぜそこに立つかを問い直すことを余儀なくさせ

る。現代の日本社会の欺瞞を厳しく問うことも、過去のキリスト者の歩みを功罪ともに問うことも、同様に非常に「キリスト教的」と言ってよいのではないかと、私は思う。そしてそこにわずかながらかかわることができた日々を誇りに思う。

さて、本研究所主任としてこれまでたいへんお世話になりました。不良クリスチャンがかろうじて2年間務めることができたのは、所員、研究員の皆様のおかげと存じます。この場を借りて、心よりの感謝を申し上げます。

篠崎 美生子

しのぎき・みおこ（主任）

研究所活動（2020年12月～2021年3月）

公開講演会 『韓国民衆神学の歴史と現在』

開催日時：2020年12月19日（土） 14:00-16:00

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

講師：崔亨默氏（チェヒョンムク、

韓国民衆神学会会長）

通訳：李相勁氏（イサンキョン、

日本キリスト教団福知山教会牧師）

キリスト教主義教育研究プロジェクト主催

公開研究会「発展か逸脱か：カルヴァンとベザの救いの確証論」

開催日時：2021年1月30日（土） 13:30-15:00

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

発題者：八木隆之氏（明治学院大学非常勤講師、

日本同盟基督教団教師）



賀川豊彦研究プロジェクト後援シンポジウム

第6回 賀川豊彦シンポジウム

『賀川豊彦から考えるコロナ禍と私たちの生活世界の変容』

開催日時：2021年2月4日（木） 18:00-20:00

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

キリスト教研究所 3月研究会

開催日時：2021年3月13日（土） 15:00-17:40

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

発表①

「内村鑑三の聖書講解と再臨信仰の水脈

——旧約から黙示録まで」

発表者：小林 孝吉（協力研究員）

コメント：千葉 眞（国際基督教大学 名誉教授）

発表②

「現代世界の「経済」を考える

——賀川豊彦著『友愛の政治経済学』（1936年）再読——」

発表者：勝俣 誠（協力研究員）

コメント：加山 久夫（名誉所員）

キリスト教文化・芸術研究プロジェクト主催

公開研究会 「音楽による神の愛の表現 第3回」

開催日時：2021年3月20日（土） 15:00-17:30

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

発表：近松 博郎（協力研究員）

「J. パッヘルベルのエアフルトにおける音楽活動

——マインツ新選帝侯就任祝賀アリアの作曲・上演を中心に——」

司会・発表：加藤 拓未（協力研究員）

「ラインハルト・カイザーの《フーノルト受難曲》(1705)

と《ブロッケス受難曲》(1712) ——台本の比較分析」



新着図書

- ・『福音と世界』No. 1、新教出版、2021。
- ・『福音と世界』No. 2、新教出版、2021。
- ・『福音と世界』No. 3、新教出版、2021。
- ・『説教黙想 アレタイア』No. 111、日本基督教団出版局、2021。
- ・『キリスト教文化』第16号（2020秋号）、かんよう出版、2021。
- ・『アウグスティヌス著作集 19/Ⅱ：詩編注解(4)』荒井洋一、出村和彦、金子晴勇、田子多津子訳、教文館、2020。
- ・『日韓キリスト教関係史資料Ⅲ 1945-2010』富坂キリスト教センター、新教出版社、2020。
- ・『近代日本のキリスト者 その歴史的位相』村松晋著、聖学院大学出版会、2020。（村松晋氏寄贈）
- ・『日韓関係論草稿 ふたつの国の溝を埋めるために』徐正敏著、朝日新聞出版、2020年（徐正敏所長寄贈）
- ・『内村鑑三の聖書講解 神の言のコスモスと再臨信仰』小林孝吉著、教文館、2020年。（協力研究員 小林孝吉氏寄贈）
- ・『日本型新自由主義の破綻—アベノミクスとポスト・コロナの時代』稲垣久和、土屋修著、春秋社、2020年。（協力研究員 稲垣久和氏寄贈）
- ・『私たちは学会会議の任命拒否問題に抗議する』人文社会科学系学協会連合連絡会、論創社、2021年。（篠崎美生子主任寄贈）



あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第84号

2021年3月19日 発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩